

シャイバーン朝とオスマン帝国

——文書史料に見る交通路の変遷——

堀 川 徹

はじめに

恩師の故羽田明先生は、本誌第4号に「明帝国とオスマン帝国」と題する論文を発表され¹⁾、和田博徳氏の論考[Wada 1958]を批判しつつ両帝国間の交渉について論じられたが、その中で、16世紀における中央アジアとオスマン帝国との交通についても触れられている。すなわち、明とオスマン帝国との交渉は、和田氏が主張する如く嘉靖三年(1524年)に開始されたのではなく、既に15世紀から明代を通じて関係があったが、16世紀初頭のウズベクの侵入によるティムール朝の壊滅で中央アジアが混乱したことと、シーア派サファヴィー朝がイランに興り、東でウズベクと、西でオスマン帝国と対立・抗争したことにより、東西交通が多少とも妨げられたとする。そして、1550年頃肅州で仕入れた大黄をヴェニスで売却したハージー・ムハマドの中国旅行談を引用し、彼が往路はタブリーズ、スルターニーヤ、カズヴィーン、ヴァラーミーン、ヘラート、プハーラー、サマルカンドといった「普通の隊商路」をとったが、帰路はウズベク(Yeşil-baş)の君主がイスタンプルに派遣した使節一行に同行して、カスピ海の北経路でクリミア半島のカフファに到着したことから、東西トルコ族の間に北方草原路を経由して交通が行われていたと論じた。

これとは別に、三橋富治男氏は同じく和田氏の論考に触発されて「十六世紀のオスマン・トルコと中亜・南露周辺」を発表し[Mitsuhashi 1963]、オスマン帝国とシャイバーン朝の関係に正面から取り組んだ。その中で氏は、オスマン・トルコの最大問題は、第一にイランのサファヴィー王朝との抗争関係であり、第二にモスクワ大公国の南下に伴うカスピ海・黒海北辺ムスリムの混迷とそれらとの接触関係であったとし、スレイマン一世のオスマン火器兵団派遣を中心とした、イスラムの盟主たるオスマン・トルコのシャイバーン朝支援、および、ソコルル・メフメット・パシャのドン=ヴォルガ運河計画とア

ストラハーン遠征について説明する。そして、オスマン帝国と中央アジア・南ロシア間の相互関係が、東西交渉関係に影響を及ぼしたとして、16世紀においては、東部アナトリア、ザカフカーズ方面で接するオスマン＝サファヴィー国境は多年の対立抗争のため封鎖同然の状況にあり、16世紀中頃アストラハーンがモスクワ大公国の手に落ちるまでは、イスタンブルないしトラブゾンからクリミア、アストラハーン、マー・ワラー・アンナフルと結ぶルートが、「いわゆる“網路”の By Pass という意味でなく、本街道筋の交易通商路として」[Mitsuhashi 1963: 65]利用されたと結論づけた。

両氏とも、イラン経由の交通路に比べてカスピ海の北を通るルートが利用されたとする点で一致するが、イラン路について羽田氏が「東西交通が多少とも妨げられた」とするのに対し、三橋氏は「封鎖同然」とする点が大きく異っている。また三橋氏の説に従って、16世紀中頃までアストラハーン経由の道が「本街道筋の交易通商路」であったとすると、16世紀中葉以降どのルートが東西交通の「本街道」になったのであろうか。あるいは、オスマン＝サファヴィー国境の「封鎖同然」の状況と相俟って、オスマン帝国と中央アジアとの交通は逼塞状態であったのであろうか。こうした疑問に答える論考は、残念ながらわが国では現在まで発表されていない。

欧米およびトルコでは、両者の交渉に言及する文献が幾つか見られる²⁾。とくに、d'Encausse 1970は、A. Jenkinson の旅行記³⁾などのほか、イスタンブルのトプカプ宮殿博物館古文書室⁴⁾や総理府オスマン古文書館⁵⁾所蔵の古文書を利用して、16世紀における中央アジア経由の東西交通路について考察している。しかし、文書史料を使った実証的研究も、文書の全体的位置づけが不十分である為に、解釈が誤っているものが見られる。またこれは、16世紀を通じて交通路の変遷を歴史的に見ようと意図されたものではない。

以上のような研究の現状に鑑み、小論では、16世紀を通じてオスマン帝国とシャイバーン朝がどのようなルートを利用して交渉を持ったかを明かにしたいと考える。そこでまず、両者の関係を示す文書史料を、オスマン側のものを中心に、現在管見の及ぶ範囲で紹介して解説する。次いで、それらの史料を利用して、16世紀における両者間の交通路の変遷について考察する。それと同時に、小松久男氏が提起するように [Komatsu 1988: 107]、史料に恵まれない16世紀の中央アジア史研究のために、オスマン側の情報がどの程度利用できるかを、こうした作業を通じて検討することも本稿の目的である。

1. 中央アジアに関するオスマン史料

中央アジア関係古文書史料は、現在知られている限りでは、トプカプ宮殿博物館古文書室(TSMA)と総理府オスマン古文書館(BOA)に最も多く所蔵されている。Feridun Begによって編纂された書翰集⁶⁾には、君主間の往復書翰を中心に関係文書が集められている。そのほか、年代記に収録されている書翰も見られる[Munshi 1956:63-68]。こうした文書類は、註2)でも述べたように一部は既に先学によって研究に利用されている。また、文書のテキスト・翻訳、さらにファクシミリで文書そのものが紹介されている場合もある。まず、*TOEM*にはBOA所蔵の文書テキストが紹介されているが、その中に関係文書が若干見られる⁷⁾。文書を精力的に発表しているのがJ.-L. Bacqué-Grammontである。彼は、16世紀初頭におけるオスマン帝国とサファヴィー朝の政治関係を研究テーマに一連の論文・著作を発表しているが、それらのほとんどにはTSMA所蔵の古文書のファクシミリ・転写・フランス語訳と註が付けられており、いずれも優れた研究文献であると同時に史料集としても利用できる。文書史料の刊行ということであれば、L.Feketeのペルシア語パレオグラフィがあげられる[Fekete 1977]。中に収められたTSMA文書の写真は見易く、それにテキストとドイツ語訳が付されている。諸事件との関係では、まずSüleymanのイラク遠征(1534年)に関連して、Gökbilgin 1957に中央アジア関係のTSMAやBOA文書が紹介されている。次いで1568~69年に起きたŞoqollu Mehmet Pashaのドン=ヴォルガ運河作戦およびアストラハーン遠征に絡んで、BOA所蔵のMühimme Defteri⁸⁾の記事が研究者たちによって引用されている。Inalcık 1948、Kurat 1966には、文書の写真・テキストが付録として付けられているし、Bennigsen 1967やd'Encausse 1970では、フランス語訳で文書が紹介されている。また、1578年に開始されるオスマン朝のシルヴァーン制圧を扱う、Kütükoğlu 1962やKırzioğlu 1976の中にも古文書の記事の一部が引用されている。

中央アジア関係文書は、上述のごとき研究によって紹介されたもの、および、筆者がTSMAやBOAで見出したもの合わせて119点の存在が判明している⁹⁾。これらは歴史の各局面をヴィヴィドに伝えており、16世紀を通して総合的に扱うことができれば貴重な歴史資料となろう。しかし、文書史料独特の偏りが見られるほか、未発見の文書も数多く存在していると想像され、今後さらに調査していく必要がある。とくに指摘しておかねばならないのは、以下で見るように、16世紀後半に中央アジアから多くの使者がオスマン宮廷に到着しているにもかかわらず、彼らが持参した筈の書翰類が、1554年を最後に

TSMA その他で発見できない点である¹⁰⁾。また、Mühimme Defteri は1553年からしか残されておらず、16世紀前半に関してはこれに代わる史料がないことも、われわれにとっては残念である。このように、不確定要素は多いものの、現在分っている範囲で文書の存在を明らかにしておくことは、今後の研究にいささかなりとも寄与するものと思われる。

別表は、中央アジアに関する記事の含まれる文書を年代順に並べたものである。年代が未だ決定できないものも多く、また、疎漏や誤りも多々あると思われる。御教示をお願いする次第である。なお、文書が既発表の場合(写真・テキスト・翻字・翻訳・部分訳等)には文献名・ページ数等を出典欄に略号で記しておく。ただし、文書の存在を記すだけのものは、スペースの関係上割愛した。

別表の所蔵欄で TSMA が前半に、BOA が後半にかたまっているのは上述の理由による。BOA の文書は、ほとんどが Mühimme Defteri(文書番号欄 M.)所収のものであるが、L.Fekete が整理した Fekete Tasnifi(F.)と Mühimme Zeyli Defteri(MZ.)に若干文書が見られる。その他の分類では、現在まで関係記事を見付けていないが、最近文書の分類・整理が進捗しているようなので[Osmanlı 1990]、今後新たな史料が発見される可能性がある。内容¹¹⁾欄で「書翰」としたのは、原文では *nāme*, *mektüb*, *taqrır* などと記される、君主間あるいは王族間の公式書翰や、高官から外国君主に宛てられた書翰、それに私信等も含めたものである。「報告」は、東方情勢等に関して地方官吏らから上奏されたもの(‘ard, ‘arda-dasht)が中心である。ただし、文書番号No. 42は原文に ‘arda-dasht と記されているが、内容的にはシャイバーン朝王族から Süleyman(1520~66)への手紙であるので「書翰」とした。「勅令」はいずれも *hüküm* と記されているものである。なお「頌詩」はシャイバーン朝の ‘Ubaydallah Khan に仕える、Ibn Rūzbihān Khunji から Selīm へのチャルディラン戦勝祝に贈られた詩である。言語は、勅令やオスマン朝からの書翰、スルタンへの奏上書は、例外はあるがオスマン・トルコ語が使われている。シャイバーン朝からの書翰はペルシア語が中心で、チャガタイ・トルコ語やオスマン語のものが混じっている。

文書の内容は表でも個々に略述したが、ここでは、全体を通じての傾向を見てみよう。まず、Selīm I (1512~20)の治世までは、サファヴィー朝を共通の敵とするオスマン帝国、シャイバーン朝両国間の友好・同盟に関する書翰類や、東部アナトリアあるいはホラーサーンをめぐる軍事情勢などを伝える報告書が中心である。

例えば、No. 1 文書はブルサに到着した三人から得た情報である。Bacqué 1971で詳しく研究されているが、興味深い記事を含んでいるので簡単に紹介しよう。全文22行に

No.	ヒジュラ 曆	西 曆	所 載	文 書 番 号	語	内 容	出 典
1		Ca. 1510	T SMA E. 6670	T	中国方面から来た三人の調査	Bc(71)189-207 Fc, Tc, Tlf	
2		1511	T SMA E. 7620	T	報告 Hasan→ Bayezīd II	Bc(78)68-73 Fc, Tc, Tlf	
3	Ca. 916	1510.4-1511.3	T SMA E. 8349	P	報告 Div Sultān→ (Shāh Ismā'īl)	Fk35 259-61 Fc, Tx, Tlg	
4	Ca. 916	1510.4-1511.3	T SMA E. 11938	P	書翰 Rūstam Khān→ (Shāh Ismā'īl)		
5	n. d.		T SMA E. 8320	P	書翰 Muẓaffar Shaykh→ (Shāh Ismā'īl)		
6	918	1512.3.19-1513.3.8	T SMA E. 3148	P	書翰 'Ubaydallāh→ q. Abū al-Faḍl Kamāl		
7	918	1512.3.19-1513.3.8	T SMA E. 8322	P	書翰 'Ubaydallāh→ Khvāja Qāsim 'Alī		
8	918	1512.3.19-1513.3.8	T SMA E. 10778	P	書翰 'Ubaydallāh→ Ghiyāth/Nizām al-Dīn		
9		1512.12-1513.1	T SMA E. 6478/2	T	報告 Shādī Beg→ (Selīm I)	Bc(87)32-9 Fc, Tc, Tlf	
10	919.S.1	1513.4.8	T SMA E. 8303	P	書翰 Mīr Yazīq→ Selīm I		
11	919.JA.5	1513.7.9	T SMA E. 11404	P	書翰 'Ubaydallāh→ Muḥammad Timūr	Fk47 303-6 Fc, Tx, Tlg	
12	Ca. 920	1514.2-1515.2	T SMA E. 5845	P	報告 Sa'īd Shāh 'Alī→ 'Alā al-Davla	Fk51 319-21 Fc, Tx, Tlg	
13	920.M.下	1514.3.18-27		P	書翰 Selīm I→ 'Ubaydallāh	Fb I 374-7/I 346-9	
14	920.J.下	1514.7.12-21		P	書翰 'Ubaydallāh→ Selīm I	Fb I 377-9/I 349-51	
15		1514-1515	T SMA E. 8758	T	報告 Māmāy→ (Selīm I)	Bc(87)39-43 Fc, Tc, Tlf	
16		1515.夏	T SMA E. 6668	T	書翰 Ibeshir→ Kōdesene Begi	Bc(78)73-7 Fc, Tc, Tlf	
17		1515.8.中	T SMA E. 5674	T	報告 Bi'yīqli Mehmet→ (Selīm I)	Tn 80-1.f.17 Fc, Pr; Kz 112-3 Pr; Bc(87)147-56 Fc, Tc, Tlf Fb I 415-6/I 366-7	
18	921.B.下	1515.9.1-9		T	書翰 Selīm I→ 'Ubaydallāh		
19	921	1515.2.15-1516.2.4	T SMA E. 8334	P	書翰 Ibn Ruzbihān→ Selīm I	Fb I 416-7/I 367-8	
20	Ca. 921	1515.2-1516.2		P	頌詩 Ibn Ruzbihān→ Selīm I	Fb I 417-8/I 368-9	
21	Ca. 921	1515.2-1516.2		P	頌詩 Ibn Ruzbihān→ Selīm I		
22		1516.5.下-6.上	T SMA E. 6320	T	チャフグイー朝問答の自白調査	Tn 88.f.18 Fc, Pr; Bc(87)157- 67 Fc, Tc, Tlf	
23	Ca. 924	1518.1-1519.1	T SMA E. 8358	P	書翰 Jānibeg Sultān→ Selīm I	dE 418-20 Tlf	
24	Ca. 924	1518.1-1519.1	T SMA E. 12175	P	書翰 Mīr Shāh 'Alī Jazīra→ Qāsim Beg	Fk52 323-5 Fc, Tc, Tlg	
25		1521.春	T SMA E. 6678	T	報告 Fā'iq Beg→ (Süleymān)	Bc(79)260-3 Fc, Tlf	

26	927.Sh.10	1521.7.16	TsMA	E.6627/1	T	報告	Dāvud Beg→(Süleymān)	Bc(87)300-7 Fc, Tc, Tlf
27	928	1521.12.1-22.11.19	TsMA	E.4256	T	書翰	Mirzā Husayn→Fā'iq Beg	Fk61 357-9 Fc, Tx, Tlg
28	Ca.936	1529.9-1530.8	TsMA	E.9614	P	報告	Farrukh Shād Istāmsūrī→(Süleymān)	Bc(70)430-53 Fc, Tc, Tlf
29		1530-1533	TsMA	E.1291	T	シャイバーン家所領一覧		Gk 463-5 Tc
30	939	1532.8.3-1533.7.23	BOA	F.121	T	書翰	Süleymān Pasha→Ibrāhīm Pasha	Fk62 361-70 Fc, Tx, Tlg
31	940.M.10	1533.8.1	TsMA	E.5441	P	書翰	'Ubaydallāh Khān→Süleymān	FB II 51-2/II 73
32	n.d.				T	書翰	Süleymān→Özbeğ sultānī	
33	940-942	1533.7-1536.6	TsMA	E.5686	P	書翰	'Ubaydallāh Khān→Ibrāhīm Pasha	Gk 465 Tc
34	n.d.		BOA	F.129	T	報告	Qāytmīsh→Ibrāhīm Pasha	FB I 585
35	941.M.27	1534.8.8			T	ウズベグの使者到着に関する情報		Gk 470-6 Tc
36	941.S.10	1534.8.21	TsMA	E.4080/2	T	報告	Ibrāhīm Pasha(→Süleymān)	dE 420-2 Tlf
37	941.Sh.11	1535.2.15	TsMA	E.5905	T	書翰	'Ubaydallāh Khān→Süleymān	Bc(86)169-73 Fc, Tc, Tlf
38	941.Sh.25	1535.3.1	TsMA	E.12284	CT	書翰	'Ubaydallāh Khān→Süleymān	FB I 606-8/I 493-5
39	947.DhA	1541.2.27-3.28	TsMA	E.5489	P	書翰	'Abd al-'Azīz Khān→Süleymān	
40		Ca.1550	TsMA	E.9661	T	書翰	Baraq Khān(→Süleymān)	
41	957.JA.14	1550.5.31			T	書翰	Süleymān→'Abd al-Latīf Khān	
42	n.d.		TsMA	E.8332	CT	書翰	'Alī Sultān→Süleymān	FK74 425-31 Fc, Tx, Tlg
43	961.N	1554.7.1-30	TsMA	E.9696	P	書翰	Baraq Khān→Süleymān	
44	961.DhA.29	1554.10.26	BOA	M.1-813	T	勅令	→Shām beglerbegi	FB II 80-1
45	963.R	1556.2.13-3.12			P	書翰	Baraq Khān→Süleymān	FB II 81-3
46	963.J.20	1556.5.1			P	書翰	Baraq Khān→Muṣṭafā Rūmīの親戚	FB II 83-4
47	n.d.				T	勅令	→Kafa begi	FB II 84-5
48	963.Sh.6	1556.6.15	BOA	M.2-953	P	書翰	Süleymān→Baraq Khān	
49	964.B.上	1557.4.30-5.9			T	勅令	→Üsküp qāđisi	FB II 48-9/II 71-2
50	967.M.29	1559.10.31	BOA	M.3-471	T	書翰	Süleymān→Pīr Muḥammad Khān	
51	968.Dh.下	1561.9.2-10			T	書翰	Süleymān→Qrīm Khān	
52	975.B.7	1568.1.7	BOA	M.7-667	T	書翰	(Selīm II)→Qrīm Khān	
53	975.B.8	1568.1.8	BOA	M.7-671	T	勅令	→Ḥalep beglerbegisi	Hr 35-6 TIE
54	975.B.22	1568.1.22	BOA	M.7-748	T	勅令	→Shāmに至るまでのq.たち	

No.	ヒジュラ暦	西 暦	所 蔵	文書番号	語	内 容	出 典
55	975.B.22	1568.1.22	BOA	M.7-749	T	勅令 → Shām の defter kekühüd Ahmed Beg	
56	975.B.25	1568.1.25	BOA	M.7-760	T	勅令 → Shām に至るまでのq.たち	
57	975.B.25	1568.1.25	BOA	M.7-761	T	勅令 → Shām emīr-i hājī	
58	975.Sh.10	1568.2.9	BOA	M.7-829	T	勅令 → Edirne ~ クリム の q., b., dizdār ち	
59	975.Sh.10	1568.2.9	BOA	M.7-838	T	勅令 → Kafa begi	Rf 4 Tx; Bn 432 Tlf; dE 410 Tlf
60		1568	BOA	M.7-2722	T	書翰 Selīm II → Tātār Khān	Rf 4-5 Tx; In v.4 Fc; Bn 433 Tlf; dE 410 Tlf; Kr 05 Tx
61		1568	BOA	M.7-2723	T	書翰 Selīm II → Khorezm Khān	In v.1 Fc; Bn 434-5 Tlf; dE 410 Tlf; KrI 03-4 Tx
62	976.R.15	1568.10.7	BOA	M.7-2228	T	勅令 → Azaq までの b. や q. たち	dE 406 Tlf
63	976.R.23	1568.10.15	BOA	M.7-2277	T	勅令 → Kafa, 国境までの b., q., iskere emīn	
64	976.B-N	1568.11-1569.3	BOA	M.7-2721	T	書翰 Selīm II → Abū Sa'īd	
65		1569.11.21	TSGADA	K.13	R	報告 Semen Elizār'ev Mal'tsev → Ivan IV	Sd 153-9 Tx; KrV 011-22 TIT
66		1570			T	書翰 Selīm II → Ivan IV	FB II 552-3; In v.XI 400-2 Tx
67	979.JA.17	1571.10.8	BOA	M.16-3	T	書翰 Selīm II → Ivan IV	KrVII 049-50 Tx; Bn 443-4 Tlf
68	979.Sh.17	1572.1.4	BOA	M.18-230	T	勅令 → Baghdād の beglerbegi と defterdār	
69	979.Sh.17	1572.1.4	BOA	M.10-142	T	勅令 → イスタンブール ~ 国境間の q. たち	
70	979.Sh.19	1572.1.6	BOA	M.16-657	T	勅令 → Shām emīr-i hājī	
71	979.Sh.23	1572.1.10	BOA	M.10-138	T	勅令 → Baghdād beglerbegisi	dE 407 Tlf
72	980.S.28	1572.7.10	BOA	M.19-360	T	勅令 → Sham beglerbegisi	
73	980.Dh.21	1573.3.25	BOA	M.21-465	T	書翰 Selīm II → 'Abdallah Khān	
74	980.Dh.3	1573.4.6	BOA	M.21-598	T	勅令 → イスタンブール ~ クリム 間の q. たち	
75	980.Dh.16	1573.4.19	BOA	M.21-631	T	勅令 → Üzü までの b. や q. たち	
76	981.M.3	1573.5.5	BOA	M.21-716	T	勅令 → Kafa begi	Kz 74 Pr

77	981. M. 8	1573. 5. 10	BOA	T	勅令	→ Shaykh Qāsim Naqshbandī	
78	981. B. 26	1573. 11. 21	BOA	T	勅令	→ Başra beglerbegisi	dE 408 Tlf
79	981. Dh. 28	1574. 4. 20	BOA	T	勅令	→ Azaq begi	Kz 74 Pr
80	982. M. 3	1574. 4. 25	BOA	T	勅令	→ Azaq begi	
81	982. B. 7	1574. 10. 23	BOA	T	勅令	→ Halep qaḏısi	
82	982. Sh	1574. 11. 16-12. 14	BOA	T	勅令	→ Halep beglerbegisi	
83	986. JA. 22	1578. 7. 27	BOA	T	勅令	→ Vazır Mustafā Pasha	
84	n. d.			T	書翰	大宰相 Mehmet Pasha → ‘Abdallāh Khān	FB II 235-6/II 143-4
85	n. d.			T	書翰	Murād III → ‘Abdallāh Khān	FB II 242-3/II 150-1
86	n. d.			T	書翰	→ ‘Abdallāh Khān	FB II 243-5/II 151-3
87	987. S. 5	1579. 4. 3	BOA	T	書翰	Murād III → Qrīm Khān	
88	987. S. 5	1579. 4. 3	BOA	T	事務処理		
89	987. JA. 5	1579. 6. 30	BOA	T	書翰	Mehmet Pasha → ‘Othmān Pasha	Sf 860-1 Tx; Kz 272, 434-6 Tc, Pr
90	n. d.			T	書翰	‘Abdallāh Khān → Murād III	FB II 565-6/II 484-5
91	990. S. 24	1582. 3. 20	BOA	T	勅令	→ Kafa までの b. や q. たち	
92	990. S. 24	1582. 3. 20	BOA	T	勅令	→ Kafa までの q. たち	
93	990. JA. 2	1582. 5. 25	BOA	T	勅令	→ Özbek ~ イスタンブールの b., q. たち	dE 412 Tlf
94	990. JA. 2	1582. 5. 25	BOA	T	勅令	→ 諸 khās, Jatālja, Silivri などの q. たち	
95	990. JA. 2	1582. 5. 25	BOA	T	勅令	→ Kafa の beglerbegi と nāzır	
96	990. JA. 2	1582. 5. 25	BOA	T	勅令	→ Vazır ‘Othmān Pasha	
97	990. JA. 2	1582. 5. 25	BOA	T	勅令	→ Kafa beglerbegisi と Azaq begi	
98	990. JA. 2	1582. 5. 25	BOA	T	勅令	→ Vazır ‘Othmān Pasha	
99	990. JA. 9	1582. 6. 1	BOA	T	勅令	→ Vazır ‘Othmān Pasha	Kz 336 Pr
100	990. JA. 17	1582. 6. 9	BOA	T	書翰	Murād III → Shirvān aḥālīsi	
101	990. B. 9	1582. 7. 30	BOA	T	書翰	Murād III → Bashachuq Malik	
102	990. N. 8	1582. 9. 26	BOA	T	勅令	→ Boghdān voyvoda, q., Isāqchī 港 emīn	
103	991. JA. 8	1583. 5. 30	BOA	T	勅令	→ Shām の beglerbegi と defterdār	
104	991. Sh. 3	1583. 8. 22	BOA	T	勅令	→ Sham emīr-i ḥajī	

互ってオスマン語で書かれたこの文書は1～2行目に表題が書かれ、以下3～13行・14～19行・20～22行と3段落に分かれている。まず、表題は「中国(Khitāy)方面からブルサに三名の者がやって来た。その中の二人は中国から、一人はヘラート(Herī)から[である]。以下に記されている諸情報は、これらによって齎された」と書かれ、ここに記される情報が、東方からオスマン帝国の旧都ブルサに来た三人から得られたことを示している。

第一段落では、トゥルキスターンのベグ Burunduq Khān¹²⁾とモグールのハーン Sulṭān Mansūr¹³⁾が、サファヴィー朝クズル・バシュ(qizilbash)軍団の暴挙を聞いて Sharbeg Khān(Shaybanī Khān)¹⁴⁾に使者を派遣し、協力して彼らを討つことを提案した。ところが、サマルカンドを委ねられていた Shaybanī の息子 Muḥammad Tīmūr Sulṭān は、この申し出は計略であると考え、Burunduq に戦いを挑んだが敗れ去った。Shaybanī は、Burunduq に戦いを仕掛けた Tīmūr の非を咎めて処刑しようとしたが、Burunduq の執り成しで思いとどまったと記されている。第二段落は第一段の内容を受けて、三者の同盟が合意に至ったことが記され、ホラーサーンに居た Shaybanī が連合軍結成の為にサマルカンドへ向かうと、カーブルの支配者 Babur が、その情報をクズル・バシュに送った為に、彼らはホラーサーン地方へ向かい、シャーバーン月にマシュハド市に到着した。「また、シャーバーン月にクズル・バシュがホラーサーンに到着したと、タブリーズから情報が届いた」と述べられている。以上のように、第一・第二段はシャイバーン朝を中心にした中央アジア・ホラーサーン情勢とサファヴィー軍の動静が伝えられているのである。時期は、両軍が衝突した年(916年)のシャーバーン月、すなわち、1510年11月であった。戦闘はシャーバーン月29日/1510年12月1日に起こっているの、その寸前ということになる。

ところで、以上までの記事の史料価値を考えれば、その評価は決して高いものではない。敵対関係にあったウズベグとカザフ、あるいはウズベクとモグールが同盟を結ぼうとしたとの情報は他史料には見られず、Bacqué-Grammont が指摘するように [Bacqué 1971 : 198], 単なる空想の産物であるかもしれない。また、Babur の役割についても、この時彼と共にカーブルに滞在していた Mīrzā Ḥaydar は、彼が事件後のラマザーン月始め(1510年12月初旬)に初めて Shaybanī の敗死を知ったと伝えており [TR 1898 : 237 ; Mano 1987 : 199], 信頼できない。唯ここで、Bacqué 1971が触れていない点を二つ指摘しておきたい。第一は、A.Vámbéry が利用した、18世紀初頭に西トルキスターンで書かれた *Ta'rikh-i Mīr Sayyid Sharīf Raqīm* には、Shaybanī がヘラートに居た時、Shah Ismā'īl がマシュハドに接近しつつあるとの情報到着と同時に、彼の息子 Muḥammad

Tīmūr がカザフに対して進軍中、Boyunsiz Hasan (=Burunduq Khan?)¹⁵⁾の奇襲を受けて惨敗したとの知らせが届いたと記されている[Vámbéry 1873 : 268]。これは、当該文書の記事と部分的に符合しており、文書情報の総てを荒唐無稽なものとして退けてしまうのは憚られる。もう一つ注目したいのは、第二段落最後の「また、シャーパーン月にクズル・バシュがホラーサーンに到着したと、タブリーズから情報が届いた」との一文である。何故なら、これは中国方面から来た三人より得られた情報ではなく、調書の作成にあたった人物が挿入した文であり、東方の新興勢力サファヴィー朝の動きにオスマン側が注意を払い、間諜などによって情報の収集に努めていた証拠であると思われるからである。そうした報告は、後述するように幾つか見られるが、1510年の段階でオスマン朝が東方情勢に並々ならぬ関心を持っていたことが分るのである。しかしながらこの時点では、Vámbéry らが言うような、シャイバーン朝とオスマン帝国の外交関係が成立していたこと[Vámbéry 1873 : 268 ; Semenov 1954 : 73]を示す材料は見当たらない。

さて、文書の第三段落では、中国の天子(大明皇帝)がイスラームに改宗し、異教徒のカルマクに勝利した。そして、中国のハーンがムスリムになったとの噂はサマルカンドにまで達していると伝えられている。ここに登場する大明皇帝は、1505年に即位した武宗正徳帝であろう。既に指摘されているように[Bacqué 1971 : 201]、中国皇帝のイスラーム改宗の話は、‘Alī Akbar や Seyfi Chelebr の著作にも見られる[Ali 1978 : 144 ; Seyfi 1968 : 165-166]が、これは同帝の豹房および豹房新寺建設や数々の奇行と係っていると思われる。‘Alī Akbar は武帝即位後、少くとも3年間は中国に留っていたというから[Oda 1969 : 92]、彼の著した *Khitāy-nāme* とこの文書の情報源は極めて近いと言って良からう。また、明史卷16武宗紀には、正徳三年(1508)から五年まで毎年サマルカンドより朝貢が見られ、中国皇帝のイスラーム改宗の噂がサマルカンドにまで広まっていたことも十分に考えられる。しかしいずれにしても、情報のレヴェルは低くこの部分は風評の水準にとどまっていると言えよう。

オスマン朝がサファヴィー軍の動静に強い関心を持っていたことは先に触れたが、東方へ放たれた間諜やオスマン領東部に派遣された官吏らの収集した情報がイスタンブルに報告されている(No. 2, 9, 10, 15, 17)。在地の支配者からの書翰、私信や捕えた敵の間諜の自白書も重要な情報源であった(No. 16, 22, 24)。また、元来サファヴィー朝等オスマン朝以外の勢力に所属していたと思われる上奏文・書翰(No. 3, 4, 5, 12)や、シャイバーン朝の ‘Ubaydallah が差出人となっている書翰(No. 6, 7, 8, 11)も見られる。どのような経緯でトプカプ宮殿に収められたか不明であるが、いずれもチャルディラー

ンの戦(920年ラジャブ月2日/1514. 8. 23)以前のもと考えられ、あるいは、Selīm I の東部アナトリア・アゼルバイジャン遠征、とくにタブリーズ占領の際に、オスマン朝の手に落ちたのかもしれない。

オスマン・シャイバーン両王朝間の国交が開始されたのは、恐らく1514年のチャルディランの戦直前であった。FB 1274-75に収められた往復書翰(No. 13, 14, 18)は、920年ムハッラム月末(1514. 3. 18~27)から始まっている。ウズベグ側から戦勝祝(No. 19, 20, 21)がこれに続く。そして、Selīm によるエジプト征服を祝う書翰が残されている(No. 23)。彼が歿する1520年までの両国関係を一言でいえば、サファヴィー朝を共通の敵として友好関係が生じ、強固な同盟が結ばれた時期といえよう。オスマン朝は、イラン・ホラーサーン情報を盛んに収集していたが、サファヴィー朝との決戦を前にその背後にあったシャイバーン朝に同盟を求めた。一方、サファヴィー朝に最大の脅威を感じていたシャイバーン朝側も、共に敵にあたることのできる相手を求めていた。彼らは Selīm によるチャルディランの戦勝やエジプト征服を知って、彼を最も信頼できる同盟者と見なしたのであろう。24×167.5cmの上質紙に91行に亘ってナスターリク体で記された、シャイバーン朝の Jānībeg Sultān¹⁶⁾から Selīm への祝賀親書(No. 23)がそれを物語っている。

Süleymān の治世にも、Selīm 時代と同様に東方情勢に関する情報の収集が熱心に行われていた(No. 25, 26, 27, 28, 29, 30, 34, 36)。Bacqué 1970で紹介されている No. 29は、それらの中でも貴重な史料で、Sultān Abū Sa'īd の治世(1530-33)におけるシャイバーン朝王族の所領と兵力を記した一覧表である。「サマルカンドのハーン、Abū Sa'īd Khān, 7万の兵があるようだ。ブハーラーの支配者(hākīm), 'Ubaydallah Khān, 7万の兵があるようだ。」という具合に記述がなされ、最後に、Babur の息子たちをはじめティムール家一族の6名が列挙されている。シャイバーン朝初期における各家系の所領の推移を考察する上で重要な史料である[Horikawa 1989: 37-38, 202]。No. 30文書は、ホラーサーン方面から退却したシャイバーン朝王族の情報を含んでいる。この様に、Süleymān の治世初期には、東方に関する情報を精力的に集めていたことは看取できるものの、両者間に交流があった証拠は見当たらない。恐らく、ハンガリー攻略に忙殺されていた Süleymān にとって、東方問題に積極的に取り組む余裕がなかった為と思われる。

1533年1月にイスタンブルに到着したオーストリア大使との間に和平が締結された¹⁷⁾のと時期を同じくして、Süleymān と 'Ubaydallah との書翰の交換が開始される。両者間の交流は、前者のイラン・イラク遠征(1534年)をはさんで続けられた(No. 31, 32, 33,

35, 37, 38)。No. 35に拠ると、遠征途次の Süleymān は1534年8月8日にシヴァスで、ウズベグの使者と会っており、彼の遠征がシャイバーン朝と緊密な連絡を取りながら行われたことが窺われる。彼はその後、サファヴィー朝に対して直接大がかりな軍事行動に出るより、むしろ、シャイバーン朝を鼓舞して背後より牽制する作戦を採ったようで、後者もこれに応える形でホラーサーン攻撃を敢行している (No. 39, 40, 41, 42, 43)。1555年に、Süleymān はサファヴィー朝とアマスィヤにおいて和平を締結する一方で、シャイバーン朝に対しては、1554年に援助として大砲と軽砲 (top va darbuzan) を300人のイエニチェリ軍と共に送り、関係を密にする努力を怠らなかった (No. 45, 46, 47, 48)。周知のごとく、Seydi 'Alī Re'īs¹⁰⁾はこのイエニチェリ軍と、1556年6月にサマルカンドで出会っている [Seydi 1895-96 : 65 ; 1899 : 70]。その後も両者間に使節の往来があったことは、残された書翰 (No. 49, 51) や Mühimme Defteri に収録された勅令 (No. 50) から判明する。その他、この時代に中央アジアからの巡礼者に、オスマン朝政府が保護を与えていたことを伝える文書も存在している (No. 44)。

Süleymān 歿後、1567年に Selīm II はアストラハーン遠征を決意した。この事件は中央アジアとも深く係っている。1552年にカザンを征服したモスクワ公国は、1554年にアストラハーンを占領し、その勢力はカスピ海に達した。これに対して、Süleyman は1563年にアストラハーン遠征の準備を命じたが、マルタ島遠征問題が生じたために見送りとなった [Refiq 1915 : 1]。Selīm II というより、大宰相 Şoqollu Mehmet Pasha は彼の遺志を継いだわけである。この時のドン=ヴォルガ運河開鑿計画とアストラハーン遠征については、三橋氏が詳細に紹介しており [Mitsuhashi 1963 : 44-65]、また、既述のごとく専論も幾つか発表されているので、ここでは中央アジアと関係する部分のみ取りあげることとする。すなわち、オスマン朝が遠征に踏み切った理由の一つが、中央アジアのイスラーム勢力の要請に応えたものだということである。次章で詳しく考察するが、Mühimme Defteri に残された一連の文書に拠ると、当時中央アジアからの巡礼は、イラン経由の道を塞がれた為にアストラハーン (Ezhderhān) 路を利用し (No. 52, 53)、オスマン朝の保護を受けて聖地へ向かっている (No. 54, 55, 56, 57, 58, 62, 63)。巡礼路の安全確保が、イスラーム世界の盟主たるオスマン朝の責務であり、同時に遠征の大義名分であった (No. 59, 60, 61)。この間、モスクワの使者から Ivan IV への報告書 (No. 65) や Selīm II から Ivan に宛てた書翰 (No. 66, 67) でも、アストラハーンと中央アジア間の交通問題が取り上げられており、これが対立の焦点であったことは間違いない。1570年に両者間の和平が成立し、アストラハーン路往来の安全がモスクワによって保障される¹¹⁾が、その後、

中央アジアからオスマン帝国領にやって来た使者や巡礼・商人の安全・保護やトラブルに関する文書が多くなる(No. 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 89, 102, 103, 104, 106)。これは、アストラハーン問題が一応解決したことに因って、東西交通が活発化した現れであると思われるが、次章でさらに検討を加えたい。

Shah Tahmāsp の死(1576年)後、オスマン朝の対イラン戦争が再開される。オスマン軍は、カフカス・シルヴァーンからアゼルバイジャン方面で作戦を展開するが、一方ホラーサーン方面ではシャイバーン朝の‘Abdallah Khan II がイラン攻撃を開始する。オスマン＝サファヴィー間の和平が締結される1590年3月まで、さらにその後も、オスマン朝とシャイバーン朝との間には頻繁に使者が往復し、Süleyman の時に見られたような武器供与も行われた(No. 83, 84, 86, 87, 88, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 100, 101, 105, 110, 111, 112, 113, 115, 116, 117, 118, 119)。この間に、‘Abdallah Khan らの要請でアストラハーン再遠征の計画が立てられたものの(No. 107, 108, 109)、結局実行に移されることはなかった。なお両者の交通路として、当時シルヴァーンからカスピ海を横断するルートが利用されたのであるが、この問題も次章で検討することにしたい。そのほかに、オスマン帝国領内で死亡した中央アジア出身者の遺産問題等に係る文書も若干存在していることを述べておこう(No. 64, 81, 82, 85, 114)。

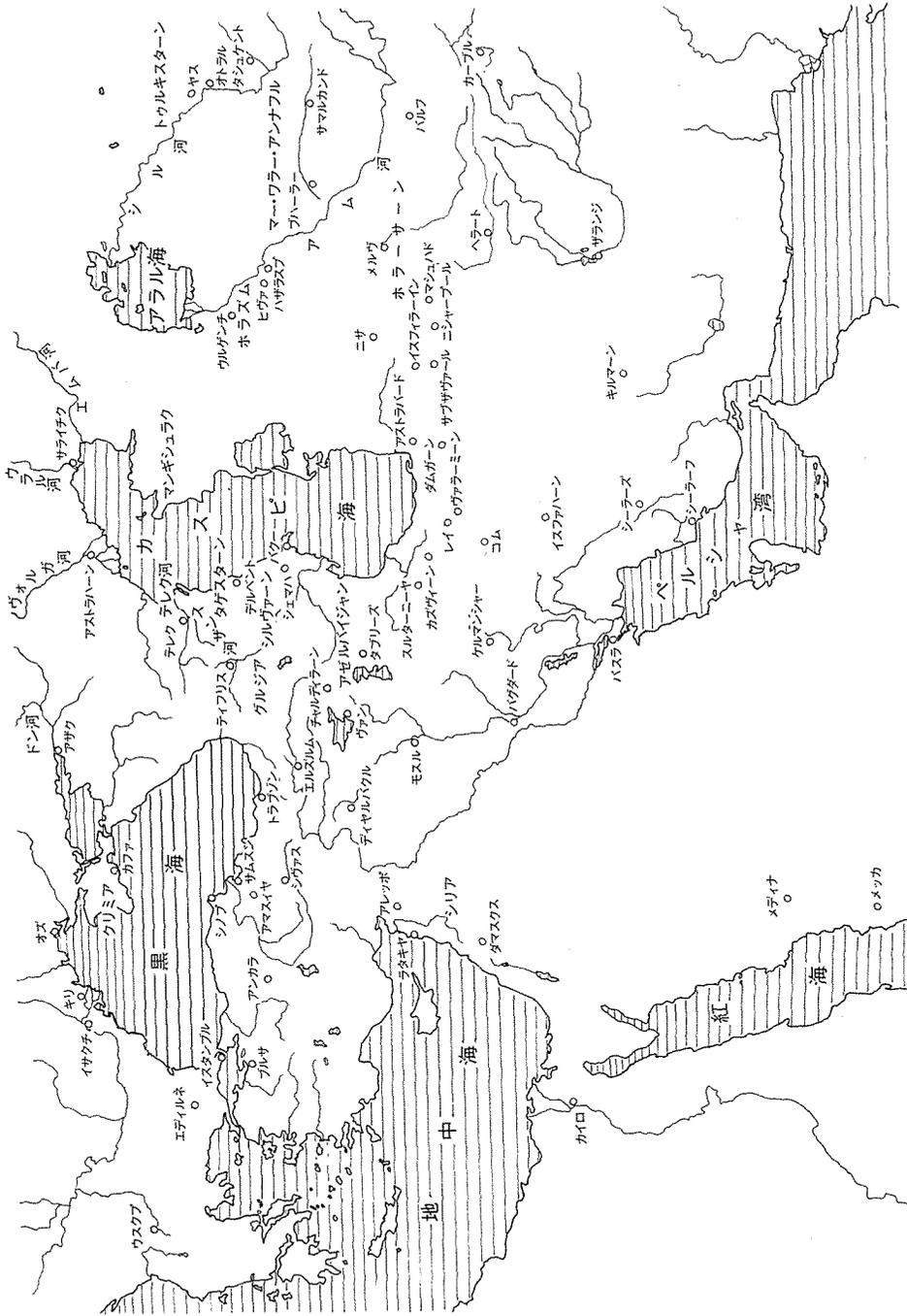
本章では、一覧表にして紹介した文書の内容を概観した。16世紀を通じてオスマン帝国とシャイバーン朝は、三橋氏の指摘通り、サファヴィー朝イランとの戦、およびモスクワ公国のアストラハーン占領という二大問題における共通の利害のもとに、密接な同盟関係を保持していた。オスマン側は、早くから東方情勢に強い関心を示していたが、シャイバーン朝との接触は1514年のチャルディラーンの戦直前であったと思われる。そして、両者の関係は、情報の収集、使節の往来、軍事同盟、武器・兵員の供与、巡礼・商人の安全確保、巡礼の保護・援助など様々な側面を見せながら展開していったのである。

2. 交通路の変遷

16世紀を通じて、オスマン帝国と中央アジアとの交通がどの様に行われていたかを考察する際に、まず東西を結ぶ商業・交通路について論じた d'Encausse の業績を紹介し検討してみよう。

氏は、オスマン帝国領と中国との間に、2 幹線道路と 4 連絡路が存在していたとする。

I 北ルート：(a)アザク→サライ→アストラハーン→ウルゲンチ→ヒヴァ→オトラル、そして天山北路経由で北京へ。(b)アストラハーンから海路マンギシュラクを経てウルゲ



ンチへ。(c)ベラサグンからモンゴル高原経由で北京へ。(d)カファから陸路黒海北岸に沿って東進し、カスピ海西岸を東北に進んでアストラハーンに出る。

Ⅱ 南ルート：(a)トラブゾン→エルズルム→タブリーズ→スルターニーヤ→カズヴィーン→マシュハド→メルヴ→ブハーラー→サマルカンドからカーシュガル経由で北京へ。(b)ラタキヤ→アレppo→モスル→タブリーズからⅡ(a)ルートに合流。(c)メルヴからバルフ経由でカーシュガルへ。

Ⅲ 南北連絡路：(a)アストラハーン→デルバント→シエマハ→カズヴィーン。ⅠとⅡの幹線を繋ぐ。(b)ウルゲンチからヒヴァ→ブハーラー→バルフへ。

Ⅳ イスタンブルと幹線路との連絡路：(a)イスタンブル→エディルネを経てアザクへ向かう陸路。(b)イスタンブル→カファ→アザク海路。(c)イスタンブル→トラブゾン海路。(d)イスタンブル→アンカラ→シヴァス→エルズルム→ティフリス→シエマハでⅢ(a)路と連絡。

V 巡礼路：(a)バルフ→ヘラート→ザランジ→キルマーン→シーラーズ→シーラーフからペルシア湾を渡り、アラビア半島を横断してメッカへ。(b)カズヴィーン→コム→イスファハーン→バスラから西進してメディナ→メッカへ。(c)カズヴィーン→ケルマンシャー→バグダッド→ダマスカスから南下してメディナ→メッカに至る。(d)シーラーズ→バスラ。(e)イスファハーン→シーラーズ。(d)(e)はV(b), V(a)に連絡する。Vの巡礼路はサファヴィー朝の成立以来、特に、中央アジアからの巡礼には利用が困難となった。そこで、まずⅢ(b)連絡路でウルゲンチへ出て北ルートを利用し、アザク→カファから2ルート、

Ⅵ(a)→トラブゾン→エルズルム→モスル→バグダード→バスラ→メディナ、或いは、Ⅵ(b)→シノプ→アンカラ→アレppo→ダマスカス→メディナを経由してメッカ巡礼を行ったとする[d'Encausse 1970: 401-406]。本稿で問題にしているオスマン帝国と中央アジア間の交通路に限っていえば、細部において異なるものの、イラン経由路の閉鎖とカスピ海北岸ルートの利用という点で、基本的には羽田・三橋両氏の説くと一致している。

こうした見解を支持する根拠となる記事は、第一章で紹介した文書群の中にも見られる。例えば、No. 42文書はシャイバーン家の 'Alī Sulṭān から Süleymān に宛てた書翰であるが、この中で彼は、イランに対して東西から挾撃することによって「メッカ路」が開かれることを望んでいる。勿論「メッカ路」の開通とは、サファヴィー朝の殄滅を象徴的に表現したものであるが、文字通り、巡礼路が鎖されていた当時の状況の打開をも意味して

いたと言ってよかろう。No. 52, 53は Selīm II 時代になってからの文書である。ここでは巡礼を終えた中央アジア出身者たちが、「東方地域(diyār-i sharq)経由で行くには道中の安全(amn-i ʔarīq)が無い」為に、クリミアからアストラハーン路を利用して故郷に帰ることを望んでいる旨が記されている²⁰⁾。また、No. 61文書はオスマン朝のアストラハーン遠征に関連して、ホラズムの Ḥajr Muḥammad Khān(1558-1602)に宛てた書翰の写しであるが、イランのシャーによって巡礼が投獄・留置されるので、巡礼路の確保の為に遠征が計画されていることが記されている。以上の文書史料はいずれも、サファヴィー朝が中央アジアからの巡礼を阻止した為に、それにかわる巡礼路としてアストラハーン経由の道が重要性を持っていたことを示している。文書が作成されたのは1550～60年代であるが、サファヴィー朝とオスマン・シャイバーン両王朝との抗争が1510年以降継続していたことを考慮すれば、それ以前にも、イラン経由の道が公的色彩を帯びる中央アジアからの巡礼団にとって、通行困難なルートであったと認めることができよう。一方、アストラハーン→クリミア経由路の利用については、Kırzioğlu が No. 35を引用して、1534年にイラク遠征途次であった Süleymān の本営に到着したウズベグの使者が明らかにクリミア経由でやって来たとしている[Kırzioğlu 1976: 141]のを別としても、使者や巡礼の往来に関する文書の記事(No. 48, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 66, 74, 76, 79, 80)から確認することができる。例えば、1573年に書かれた No. 76文書は、カファの beg に対する勅令であるが、アザクの Yakhshi Sa‘at Mirzā らに人を遣ってブハーラーの使者が‘Ādil 河(ヴォルガ河)を無事に通過できるよう手配することを命じている。三橋氏は「16世紀中頃アストラハーンがモスクワ大公国の手に落ちるまでは」クリミア→アストラハーン→マー・ワラー・アンナフルのルートが本街道筋の交易通商路として利用されたとして[Mitsuhashi 1963: 65]、1554年以降はこのルートが利用されなかったがごとき印象を我々に与えるが、No. 76文書を含めて、No. 48以下の文書はすべてモスクワ公国のアストラハーン征服以降のものである。オスマン朝は、アストラハーンを通過しようとする巡礼らがモスクワ側の妨害にあっているとの理由で1568年から遠征を敢行し、1570年に和平を締結している。和平締結後に交通が活発となったことは前章で指摘したが、戦い以前(1554～1568)でも往来が全く阻外されていたわけではなかったことが確認できる。三橋氏の見解は修正されねばなるまい。

以上より、オスマン帝国・シャイバーン朝双方にとって、アストラハーンが非ムスリム勢力の支配下にあるとの不満は残った²¹⁾ものの、16世紀を通じてこのルートは頻繁に利用されたと考えてよかろう。

アストラハーン路への連絡路としては、イスタンブル→カファの海路(d'EncausseのIV(b)ルート)が最もよく利用されたようであるが、他にIV(a)ルートの使用も認められる。まず、No. 58文書はエディルネからクリム・ハーンに至るまでの地方官に、ホラズムの使者が帰国するにあたっての便宜供与を命じており、使者がエディルネから黒海の北を通して東へ向かったことを示している。また No. 75文書は、黒海北岸のオズ(Oczakow)に至るまでの beg や qadī に、ブハーラーの使者がキリ(Kilia)に残した品を取りに行かせたので、その使いに便宜をはかるように命じたものであり、No. 102文書は、ブハーラーからの巡礼がモルダビアのイサクチで被害に会ったことを伝えている。いずれも、イスタンブルからエディルネを経て黒海北岸の陸路をクリミア・アザクへ向かうルートの利用を裏付けるものである²²¹。

それでは、イラン経由の道は16世紀を通じて全く閉鎖されていたのであろうか。第1章でやや詳しく紹介した No. 1 文書から、1510年頃中国またはヘラートからイラン経由でブルサへやって来た人たちのいたことが確認できる。シャイバーン・サファヴィー両軍の衝突までは、イラン路が通行できたことを示している。明代の「西域諸国」や「西域土地人物略」に拠れば、中央アジアとオスマン領を結ぶ東西交通路は依然としてイラン経由であった。もっとも堀直氏に従えば、これらの史料の「原典」は1512年から1514年の間に成立したという[Hori 1982: 839]から、明側に残された史料は、あるいは、1510年以前の国際情勢を反映しているかもしれない。商人 Ḥajr Muḥammad がイラン・中央アジア経由で肅州に達したことは知られている[Yule 1915: 290-296]が、彼がタブリーズ出身であったことを割引けば、1510年以降「敵側」の人間でイラン路の利用が明らかなのは Seydī 'Alī Re'īs である。彼がサマルカンドに到着したのは、963年シャバーン月初旬(1556年6月中旬)で、前述のごとく、ここで Süleyman が派遣したイエニチェリ軍団に出会っている。ここから、彼はホラズム経由でアストラハーン路を採る予定であったが、モスクワ公国のアストラハーン征服を知り、やむなくサファヴィー朝領内を通過する道を選び、イスタンブルに帰着したのは964年ラジャブ月初旬(1557年4月末～5月初頭)であった[Seydi 1895-96: 64-97; 1899: 69-105]。彼が「敵国」領内を無事に通過できたのは、1555年のアマシヤ和平によってオスマン・サファヴィー両国間の緊張が緩んでいたことが大きな要因であったが、イラン路が閉鎖されていなかった例証になろう。また、No. 52, 53文書は、イラン路の閉鎖を示す例として上で引用したが、中央アジアからの巡礼がイラン経由ルートの不安を理由にカファ→アストラハーン路の利用を請願したとの経緯から推測すれば、彼らが往路はイラン経由の道を選んだものの、復路は同じ道の利

用に不安を感じたと考えることも可能であると思われる。

No. 68, 70, 71, 72, 78文書は、タシュケントの支配者 Darvīsh Khān の使者 Sayyid (Sayyidī) ‘Alī およびその随行員に係るものである。このうち、No. 70文書から彼らがメッカ巡礼に向かったことがわかる。ところが No. 71文書には、彼らがイスタンブルへの途次バスラに到った時に、前のベイレルベイ ‘Alī が彼らから関税を徴収したということである。そこで、バグダードのベイレルベイに対する勅令では、この ‘Alī から金を返却させてダマスカス (Shām) へ送り、巡礼に向かっている使者たちに渡すよう命じている。No. 72文書はダマスカスのベイレルベイに送られた勅令で、バグダードのベイレルベイ Murād が金をダマスカスへ送ったので、使者が聖なるカーバから帰った時に金を渡して受領書を取るよう命じている。一連の記事から、タシュケントの使者が979年シャバーン月にイスタンブルを出発してシリア経由で haj に向かい、巡礼を済ました後同じくシリア経由で戻って行ったことが判明する。バグダードのベイレルベイに金をダマスカスまでわざわざ送らせている点から判断して、恐らくこの使者は、シリアから東方へは進まず北ルートを使って帰国したと推測される。問題は彼らが往路バスラを通っていることである。手持ちの材料では、どのルートを経てバスラに到達したか明らかにすることは困難である。ただ、インドから海路を利用した可能性を考慮しなければ、タシュケントからマー・ワラー・アンナフルを経て、d’Encausse の II (a) 路でカズヴィーンに至り、そこから V (b) 路でバスラに到着したと考えるか、あるいは、キルマーン経由の V (a) 路でシーラーズに、そこから V (d) 路でバスラに達したとみるのが最も妥当と思われる。後者のルートに関しては、時代的に半世紀以上前になるが No. 17文書が伝えている。これに拠ると、当時 (1515年8月中旬) ティムール家の Badr al-Zamān Mīrzā の子 Muḥammad がアストラバード、イスフィラーイン、ニシャープール、サブザヴァールを占拠した為、イラク―ホラーサーン間の交通が途絶えた。そこで、カズヴィーンを本拠地とするサファヴィー朝はキルマーン経由でホラーサーンの情報を得ていたという。タシュケントの使節は、あるいはこの時サファヴィー朝の本拠地を避けて、キルマーン路へ迂回した為にバスラに現われたのかもしれない。d’Encausse は No. 78文書を VI (a) ルート、すなわち、カファから黒海を横切ってトラブゾンに上陸し、エルズルム→モスル→バグダード→バスラ→メディナという巡礼路がバスラを通る証拠として引用しているが、それでは、君主から遣された使者がオスマン皇帝に面謁する前に遠回りをして巡礼を敢行し、イスタンブルを訪れた後に再びメッカへ向かったことになり到底受け容れることはできない。当時、トラブゾンとバスラを繋ぐ道も、バスラから砂漠を横断する巡礼路も存在したことは事

実であろう。しかし、北ルートを利用した中央アジアの巡礼は、オスマン政府の管理下にあったシリア路²³¹を使ったものと思われる [Yajima 1986: 116]。恐らく、d'Encausse は当時イラン路が鎖されていて北ルートのみが使用されたとの先入観から、タシュケントの使者が黒海を渡ってアナトリア東部を南下してイラク路をバスラまで行き、そこからイスタンブルへ向かうという全く現実離れした結論を導き出してしまったと見える。

以上より、従来閉鎖状態であったと見做されていたイラン経由の交通路が、公的性格を帯びた使節や巡礼によっても利用されていた可能性があることが判明した。もっとも、そうであったとしても、以前に比べれば当然その利用度は減ったと思われ、羽田氏の見解が妥当であると考えられる。

当時、中央アジアとオスマン帝国とを結ぶ交通路は上述した南北2ルートだけであったのだろうか。この疑問を解く鍵は前に若干言及した Seydi Re'is の旅行記の中に見出される。すなわち、彼はイスタンブルに帰るにあたって、幾つかの経路を考慮しているのである。まず、サマルカンドで2ルートを検討する。第一はトゥルキスターン経由、第二はブハーラー経由である。前者はタシュケントからシル河中流域のトゥルキスターン地方を通るルートであり²⁴¹、後者はブハーラーからホラズムを経てアストラハーンへ行く道である。第一のルートは Noghay 族や盗賊が跋扈しているとの理由で、彼らは第二のルートを選択する [Seydi 1895-96: 65-66; 1899: 70-72]。サマルカンドからブハーラーを経てアム河を渡り、一旦ホラーサーンに入ってホラズムへ向かう。ハザラスプ→ヒヴァ→ウルゲンチから草原を横断してヤイク(ウラル)河下流域のサライチクに到着した時、アストラハーンがロシア人に征服されて道が閉鎖されたとの情報を得る。彼らはやむなくホラズムまで引き返す。そこで、再び帰路を検討するが、第一の候補はカスピ海を渡ってシルヴァーンを経由する道(Shirvan yolu)、第二はデミルカプ(デルベント)を通るコース(Demürqapu yolu)であった。しかし、いずれも政情が不安定ということで、結局ホラーサーン→イラク経由の道のみが残される。彼らはニサからマシュハド→ニシャープール→マーザンダラーン→レイを経て首都カズヴィーンに到着。ここからアゼルバイジャン路——タブリーズ→ヴァン——を旅することもできたが、バグダード経由の道を選び、モスル→ディヤルバクルを経てイスタンブルに帰還したのであった [Seydi 1895-96: 66-97; 1899: 72-105]。この記事より、1556年当時中央アジアからイスタンブルへ向かうには、基本的に3ルートがあったことになる。第一はカスピ海の北を通る北ルートで、サマルカンドを起点にすれば、ブハーラーからホラズム経由でアストラハーンへ向かう道と、一旦東へ向かってシル河の流れに沿って北上し、トゥルキスターン地方を

經由するルートがあった。第二は南ルートで、ホラーサーン→カズヴィーンからタブリーズへ向かう道とバグダード經由の道に分かれるが、d'Encausse のルートとほぼ一致する。氏も触れていないのが第三のルートで、ホラズムからカスピ海東岸に出て海を横断し、シルヴァーンまたはデルベントから西へ向かう道であった。イスタンブルからシルヴァーンに達する道は氏がIV(b)ルートとしており、マンギシュラクからホラズムまでは Jenkinson が使ったルートとして知られている。しかし、シルヴァーンとマンギシュラクを結ぶカスピ海横断ルートについては従来ほとんど言及されることがなかった。ただ、1578年に開始されたオスマン・サファヴィー間の戦争に関連して、例えば Togan は「Murad III とその後継者の時代、1578～1611年の34年間、オスマン朝国家は全カフカシヤとアゼルバイジャンの王であった。この期間、カスピ海においてオスマン朝の旗が翻り、トルコとトゥルキスターンの間の政治関係はかなり緊密になった」と、軍事的成功によって、カスピ海横断路による中央アジアとの交通が緊密化したことを示唆している [Togan 1947 : 133]。また Kirzioğlu は「カスピ海を支配下に入れてイランを背後から襲い、モスクワの拡大をくい止める目的で、Murad III 時代の対イラン遠征の方向はグルジア・シルヴァーンが選ばれ」、「ウズベクたちへの武器援助を伴った書翰の往復、使節の往来」がシルヴァーン経由で行われたと述べている [Kirzioğlu 1979 : 260]。ここでは、これらの研究成果も踏まえながら、両者の係りを文書史料から具体的に検討してみよう。

管見の及ぶ限りでは、1578年以前にカスピ海横断ルートが両地域間の交渉に利用された形跡は、Seydi 'Alī Re'īs の記事を別にすれば見られない。Kirzioğlu に拠れば、1580年 'Othmān Pasha が設立した《カスピ海軍》(Bahr-i Kolzum Kapudanlığı)のお蔭でバクー港が繁栄し、ここから発したオスマン艦隊は、カスピ海東岸の同盟者たち——この中にウズベグも含まれる——に、イランに対して使用されるよう砲などの軍需品を届けることができるようになった。それと同時に、中央アジアからの商業・巡礼路を、カスピ海の中程を通る近道によって安全にオスマン帝国に結びつけたという [Kirzioğlu 1976 : 387]。カスピ海における艦船の建造に関しては、No. 89文書からその経緯を知ることができる。この文書は、シルヴァーンの司令官 Özdemiş 'Othmān Pasha の上申に、大宰相 Şoqollu Mehmet Pasha が1579年6月30日付で答えたものである。'Othmān Pasha は、デルベントから送った上申書で、まずデルベントを不落城となし、20隻のガレー船を建造し、イスタンブルから必要な品が補給されれば、カスピ海とそこに流入する河川の岸にある諸地方を征服することができると具申したようである。大宰相の返事は、艦船の建造には一隻あたり60～70カントール²⁵⁾の釘が必要であり柏材(pelid aghachi)が要るが、その地方

に船の建造に適する木や鉄鉱山が存するかどうか調査するようという内容であった。なお、艦船建造に必要な用具類はカファ経由でデルベントに送られたようである [Safvet 1910 : 861]。

デルベント経由の道が実際に利用された例として、1582年5月25日付の一連の勅令を紹介しよう。No. 95はカファのベイレルベイらに与えられたもので、ここでは、イスタンブルに来て帰国するブハーラーのハーン、‘Abdallah Khān の使者をデルベントまで送り届けるよう、同じ日にカファのベイレルベイとアザクのベイに出された No. 97文書ではウズベグの使者と共に行く Piyale²⁶⁾も速やかにデルベントへ送られるよう命じている。No. 96, 98はデルベントに駐留する ‘Othmān Pasha に与えられた勅令で、No. 96には、ウズベグの使者と Piyale がデルベントに到着したなら、6門の軽砲 (darbuzan), イェニチェリ (qul qarndash) 及びその他から100人の鉄砲隊 (tufang-andāz) を付けてブハーラーに派遣するよう記されている。No. 98は、オスマン側の使者 Khidr Chāvush の出発に力を貸すように命じた勅令である。この文書群より、われわれは両国の使者がイスタンブルからカファ・アザク経由でデルベントへ向かい、そこからブハーラーを目指したことを知る。さらに、同じ ‘Othmān Pasha 宛、1582年6月1日付の勅令 (No. 99) では、ブハーラーの使者が Piyale と共に、ブハーラーへの書翰を携えてシルヴァーン路経由で送られたこと、‘Othmān Pasha 自身も ‘Abdallah Khan に手紙を書き、使者と Piyale Beg を船でカスピ海経由で送ること、その船が帰ってきたなら、ブハーラーの港まで何日で行って何日で帰ったかを調査して報告することが命じられている。これより、使者一行がデルベントから船でカスピ海を渡るよう予定されていたことが判明する。先に紹介した文書と併せて考察すれば、ここで言うシルヴァーン路がカファからデルベントへの道であったことが分る。この時帰国したブハーラーの使者は、1582年3月20日付の No. 91, 92文書で述べられているカファ経由でイスタンブルに来た使者と同一であると考えられるが、彼らがブハーラーからカファまでどのルートを使ったかは残念ながら不明である。ただ、No. 99文書で、使者を送った船が帰った後に、カスピ海横断に要した日数を報告するよう求めている点から推測すれば、恐らく、カスピ海横断ルートがシャイバーン朝の使者の往来に利用されたのは、この時が初めてであったと考えられる。従って、彼らは往路アストラハーン経由でカファに到着した可能性が強い。

他にデルベント路が利用された例として、No. 112, 113文書を紹介しよう。No. 112は、デルベントに駐屯する宰相 Ja’fer Pasha に対する1588年6月11日付勅令、No. 113は司令官の Ferhad Pasha 宛で6月24日付の勅令である。いずれも、ブハーラーの使者 Hājī

Bahadır Qulı̄ と Baqı̄ Hacı̄ が, Piyale Pasha の息子 Hasan Kayf Begi 及び Mehmet Beg と共に送られたので, 必要な品物を供給して遅滞なく故国へ送るようにとの内容である²⁷⁾。この様に見てくると 1578年に開始された対イラン戦争によるシルヴァーン制圧以降, オスマン帝国とシャイバーン朝との間には, カスピ海上の交通路を利用して使節の交換がなされていたことが明白となるのである。

ここでもう一つ No. 106文書を紹介しよう。これもデルベント駐留中の Ja'fer Pasha への勅令で, デルベントから 5 日行程のテレク²⁸⁾に城が建設されれば, ブハーラー, アストラハーン, ダゲスターン, カズヴィーン等から商人たちがやって来て活発な売買がなされ, 関税その他で国庫がたいそう潤うほか, 河に近いので魚が捕れることも利益となるであろう。ここがデルベントとカファの間に位置するので, 城の建設が道中の安全に寄与すると判断されるなら実行へ向けて準備するよう命じる内容である。デルベントとカファを結ぶルートがテレクを通過していたこと, ここに城を建設する効果の一つにブハーラー方面からの商人到来が期待されていたことが判明する。イスタンブルとデルベントを繋ぐルートは, まず黒海を渡ってカファへ, そこからアザクを通過してカスピ海方面を目指し, テレクを経由してデルベントに至ったのである。1556年に Seydi 'Alı̄ Re'ıs が利用を断念したデルベント経由の道とは, このルートのことであったかもしれない。なお, No. 105文書に拠ると, ウズベグのハーンの許に派遣されたオスマン朝の使者は, デルベントからバクーを経由することになっており, Kırzioğlu が指摘するように, シルヴァーン側の港としてバクーも使われていたことが分かる。中央アジアへは, そこからカスピ海を渡り, 恐らくマンギシュラクに上陸して²⁹⁾, ホラズム経由でブハーラーに達したのであろう。シルヴァーンを掌中に収め, カスピ海艦隊を創設したオスマン朝にとって, 今や, 中央アジアとの最短交通路はシルヴァーンから海路を利用してブハーラーへと向かう道であった。

しかし, 中央アジア側にこのルートを利用しづらい事情があったのであろうか。或いは, オスマン朝との関係をより緊密にしようと意図したからであろうか³⁰⁾。995年シャヴアル月中旬(1587. 9. 15~24)に, ウズベグのハーン 'Abdallah Khān の使者が小ノガイと呼ばれるタタール族と共にイスタンブルに到着して, アストラハーンへの再遠征を求めた [Selaniki 1989 : 229-230]。No. 107, 108, 109文書はこれを受けて出されたものである。まず, 1587年10月18日付の No. 107はクリム・ハーン国のアミール Shīrīn 'Alı̄ Beg 宛の勅令である。以前には, アストラハーン遠征は成功しなかったが, 今やシルヴァーンは征服されたし, 'Abdallah Khān も援助すると言っているので, クリム・ハー

ンの Islam Girey らと協議して、どの様にすれば遠征が成功するかを具申するよう求めたものである。No. 108はノガイの Urus Beg Mīrza らに出された書翰で、同年の10月24日付である。これには、ブハーラーから帰った Piyale Pasha が遠征軍の司令官に任命されたこと、'Abdallah Khan の他にクリム・ハーンもタートル軍を率いて遠征に参加することが記されている。同じ日付の No. 109は Piyale Pasha 宛の勅令で、翌春のアストラハーン遠征の司令官に任命するという内容である。しかしながら、Togan も指摘するように「この企ては《ferman》段階より前には進まなかった」[Togan 1947 : 130 n. 71] である。

以上より、オスマン軍によるシルヴァーン征服以降、カスピ海経由のルートが使節の往来や軍事援助に利用されていたことが判明した。巡礼や商人に関しては、No. 106文書よりカスピ海西岸にブハーラーの商人が到来したことは分るものの、彼らが果してアストラハーン経由の道を選んだか、カスピ海横断路を使ったかは残念ながら不明である。また、イスタンブル→シヴァス→エルズルム→ティフリス→シェマハと結ぶ d'Encausse の IV(d)路——これが Seydī 'Alī Re'īs の言うシルヴァーン路であろうか——はオスマン軍のシルヴァーン攻撃にも重要な役割を果たした主要交通路であったが、これがカスピ海横断路と連絡して中央アジアとの交通に利用されていたか否か、現時点では不明と言わざるを得ない。

むすび

本稿では、まず16世紀におけるシャイバーン朝及び中央アジアに関する文書史料を、イスタンブルのものを中心に筆者の知る範囲で紹介した。これらの文書は、ごく一部を除いて、中央アジア史研究の基本史料とは成り難いが、シャイバーン朝とオスマン帝国の政治・外交関係を考える上で必須の材料であることは疑いない。そこで、これらを利用して両者を結ぶ当時の交通路について考察し、以下の結論を得た。

(1)16世紀において、シャイバーン朝とオスマン帝国とを結ぶ交通路は、基本的に三つのルートが存在した。第一はカスピ海の北を通る北ルート。第二はイラン経由の南ルート。第三はカスピ海を横断するシルヴァーン・ルートであった。

(2)カスピ海の北、アストラハーン経由の道は、16世紀を通じて両国の使節及び巡礼や商人の往来に利用された。三橋富治男氏の主張するように、Süleyman 時代の16世紀中頃までのみならず、モスクワ勢力によるアストラハーン征服以降も交通が途絶えることはなかった。

(3)イラン経由の南ルートは、両国とサファヴィー朝との対立関係を反映して、従来のごとく活発に利用されることはなかった。しかしながら、交通路が途絶して全く使われなくなったわけではない。

(4)1578年から開始されたオスマン軍のシルヴァーン征服活動の結果、使者の交換を中心とした両者間の交通に、カスピ海を横断するシルヴァーン路が利用されるようになった。以上である。

本稿では、存在が確認される中央アジア関係文書の全体像を紹介し、それらの史料としての有効性を明らかにする意味で交通路の変遷問題を取り上げてみた。従って、交通路に関しては、こうした文書のみを材料とした極めて大雑把な議論の展開に終始してしまった。また結論にしても、先学の研究を再確認したにすぎない。特に、(2)(3)については、既に四半世紀前に羽田先生が看破されていたところである。

最後になったが、小論作成のために多くの先学・友人から貴重な文献をお借りするなど様々ご協力を得た。ここに厚く感謝する次第である。本稿に続く作業として、今後、個々の文書史料のうち未発表のテキストを紹介・研究していきたいと考えている。

注

- 1) Haneda 1965。本論文は同氏の『中央アジア史研究』(京都 臨川書店 1982)349～354ページに再録されている。その際、題名は「明帝国とオスマン帝国」と改められた。
- 2) 両者の関係については、既に Hammer 1836-37にまとまった記述が見られるが、このテーマに強い関心を示したのが Z.V.Togan であった。彼は Bugünkü Türkistan ve Yakın Mazisi の初版(1929-39)とラテン文字版[Togan 1947]で Feridün Beg の書翰集(註6)参照), Seydi 'Alî Re'îs の旅行記(註18)参照), 諸々の年代記などを使って両者の政治的関係について考察しており、豊富な註と共にたいへん参考になる。Uzunçarşılı は FB の 1264-65版を中心に両者の関係を要領よくまとめている[Uzunçarşılı 1943: 454; 1951: 37-38; 1954: 252-260]。Allen 1963はTogan や Uzunçarşılı の研究成果を全面的に利用してまとめられたモノグラフである。トプカプに所蔵されている往復書翰の存在を教えてくれるのが Asrar 1972であり、Kortepeter 1972でもオスマン帝国と中央アジアの関係が言及されている。個々の政治事件に関連して両者の関係を扱った文献については後述する。なお、Bennigsen 1978は、クリム・ハーン国関係のオスマン文書集成であるが、オスマン帝国と中央アジアの交渉を側面から探る際に必須の史料である。序文では両者の関係について触れられている。

ソ連邦領内には関係文書・文献が数多く所蔵されていると思われるが、それらの紹介・

- 研究はほとんど見られない。1569年に生じたオスマン軍のアストラハーン遠征関係の文書が発表されている[Sadikov 1947]ほか, Murad III宛の別表 No. 115文書が言及されている[Semenov 1954: 74]程度であろう。
- 3) 1558年にモスクワ経由で中央アジアを目指した彼は、アストラハーンから海路マンガシュラクに上陸して、ホラズム経由でブハーラーに到着している[Jenkinson 1907; Johanson 1907]。彼の旅行及び当時の交易品等貿易の実態に関しては、佐口透氏の詳しい説明がある[Saguchi 1966: 24-31]。
 - 4) Topkapı Sarayı Müzesi Arşivi(TSMAと略す)。ここに所蔵されている文書のカタログは2巻まで出版され[Topkapı 1938-40], それ以降については閲覧室に備えつけの草稿目録を利用していたが, 近年種類別カタログが出版され始めた[Topkapı 1985; 1988]。
 - 5) Başbakanlık Osmanlı Arşivi(BOSと略す)。この概要については Hamada 1984: 700-702参照。また, 古文書館を利用する場合には Çetin 1979がハンドブックとして便利である。
 - 6) FB 1274-75. この史料には別の版(1264-65年版)が存在するが, 1274-75年版に見られる書翰が一部欠落しているほか, 誤りも多いと言われる[Hamada 1984: 699]ので, 1274-75版を利用する。ただし, 一覧表の出典欄には参考の為1264-65年版のページ数も付記しておく。いずれにしても, 指摘されているように[Bacqué 1987: 63], 版本の質はあまり良いとは言えず, 新しい校定本の刊行が待たれる。
 - 7) とくに, アストラハーン遠征関係文書を集めた Refiq 1915やシルヴァーン遠征関係文書を紹介する Safvet 1910は, 他の研究者によって利用されている。
 - 8) Divān-i Hümayūn で決定されスルタンの名で出された勅令の写しで, 臣下への命令書のほかに外国君主宛の書翰を含んでいる[Çetin 1979: 49-57; Hamada 1984: 701]。Quelquejay 1967: 341-342には, この中に中央アジア(Turkestan)関係文書が45点あることが既に報じられている。
 - 9) Horikawa 1986: 184で, 中間報告として99点の文書一覧表を掲載した。内容が未確認であったものや, その当時は存在に気付いていなかったものも多く, 極めて不完全な表である。
 - 10) FB 1274-75にも, Baraq Khān から Süleymān に宛てられたもの2点と, Murād III宛 'Abdallah IIの書翰が1点収められているにすぎない。一方, ウズベグからの使者は確認できるだけでも16回到来している。
 - 11) 文書分類上の用語に関しては, Çetin 1978が詳しい。
 - 12) カザフ・ハーン Burunduq(1480-1511)のこと。Shaybānīが擡頭していく過程で, この人物と主としてシル河中流域をめぐる争った。1508-09年のカザフ遠征も, この Burunduqに対するものであった[Ruzbihan 1976: 31; Horikawa 1979: 51-55]。

- 13) モグーリスタン・ハーン国の Sultān Maṣūr Khān(1501/2~1543/4)。Shaybānī と戦って捕虜となった Sultān Aḥmad Khān の長子。中国辺境に聖戦を敢行し、トゥルファン・ハミを支配下に入れたことで名高いが、カザフと戦って敗れている [TR 1898 : 123-129]。
- 14) 1500年にサマルカンド、1507年にヘラートを占領して、中央アジアにおけるティムール朝政権を打倒したが、1510年メルヴ郊外で Shāh Ismā'il に敗れ戦死する (Horikawa 1979 参照)。
- 15) TR 1898 : 231 には、1508-09年の Shaybānī による対カザフ遠征の際に、カザフ族の Qāsim Khān の amīr の一人として、Buyun Pīr Ḥasan (TR MS : 179a では TVYVN Pīr Ḥasan) の名が挙げられており (Burunduq Khān の名は見られない)、人名に関しては今後の検討が必要である。
- 16) シャイバーン朝主要 4 家系の一つ Khwaja Muḥammad 家を代表する王族。Shaybānī の従兄弟。'Abdallah Khān II の祖父にあたる。シャイバーン朝の家系については、Bacqué 1970 : 428-429 および Horikawa 1989 : 203 の系図を参照のこと。
- 17) Danişmend 1971 : 156-158 に拠れば、同年 6 月に和平締結がなされた。
- 18) オスマン朝海軍提督。ペルシア港に派遣されたが、1554年にバスラ沖でポルトガル軍に敗れ、インドのグジャラートへ逃れ、そこからアフガニスタン・中央アジア・イランを通過して帰国した。この間の出来事を旅行記に書き留めている [Seydi 1895-96]。Seydi 1899 はその抄訳本である。
- 19) この時の和平条件は、(1) アストラハーン路の開通、(2) ロシア人によって建設された要塞の破壊、(3) オスマン帝国に到る旅人たちが安全に往来できること、(4) クリム・ハーンの使者の帰国を許可すること、以上であった [Inalcık 1948 : 387]。三橋氏が指摘するように、(1)~(3) の条件がとりわけ注目される [Mitsuhashi 1963 : 64]。
- 20) この時巡礼はアレppoにあり、ここからイスタンブル、サムスン或いは他の港経由でカファへ渡ることが許されている。d'Encausse の VI(b) 路 (シノプ→アンカラ→アレppo) には、支線としてサムスン→シヴァス→アレppo 路を加えるべきであろう [Horikawa 1990 参照]。
- 21) 後述するように、1587年にシャイバーン朝の 'Abdallah Khān らの要請によって、オスマン軍の再遠征が計画されることになる。なお、Togan 1947 : 130 n. 71 では 1585年に遠征計画がなされたように記されているが誤解であろう。
- 22) No. 50 文書に拠ると、ブハーラーの使者がマケドニアのウスクブにいる。何故使者が遠回りになる土地に居たか不明であるが、イスタンブルからただちに東へ向かわなかった例として挙げることができよう。

- 23) ダマスクス(Sham)の emīr-i ḥaj の管轄下に、ここで巡礼団が組織された。巡礼団の詳細については Sakamoto 1990 : 204-207 参照。
- 24) シル河中流域から後、どの様なルートを使って帰国しようとしたか不明である。ただ、16世紀初頭にこの地方とヴォルガ河・アストラハーン方面との間で交易が行われていたことは知られている [Horikawa 1979 : 60-61]。
- 25) Redhouse に拠れば 1 qanṭār は120ポンドであるという。1ポンド453.6g であるから 54.432kg となる。Hinz 1970 : 27では 1 qanṭār(オスマン朝では qanṭār)は56.443kg であるという。
- 26) *Zubdat al-Tavārikh* に拠れば、彼はサファヴィー軍との戦いで捕虜となりカズヴィーンに連行されたが、サマルカンドへ逃れて ‘Abdallah Khān の使者と共に、990年 RA 月中旬(1582. 4. 5 ~14)イスタンブルへ戻ったという [Kütüköglü 1962 : 86 n. 47]。恐らく No. 91文書(1582年3月20付)に見えるウズベグの使者に伴われて帰国したと思われる。その後、シャイバーン朝との交渉で活躍するが、1587年に彼宛に下付された mülk-name がソ連邦アゼルバイジャン共和国科学アカデミーに残されており、彼がイスタンブルで家作等を獲得していた様子が知られる [Tveritina 1974]。
- 27) Togan は「1588年に Özdemiroğlu Osman Paşa は、Murad III の命によってバクーから海路トゥルクメニスターンに、Piyale Paşa の一族の指揮下に」艦船を派遣したと述べている [Togan 1947 : 135] が、この文書から分るように、当時デルベントに駐屯していたのは Ja’fer Pasha である。‘Othmān Pasha が Piyale 自身を船で送ったのは前述の如く1582年であり、誤解があると思われる。
- 28) テレクの地名は、時を異にしてテレク河沿いに少なくとも3箇所比定できるようであるが、これは、テレク河とスンザ河の合流地点に1578年から85年の間に新しく建設されたか或いは改築された町で、後にロシア人によってテレク河下流に建設されたテレク(Terki)の町とは異なると考えられる [Allen 1972 : 20-23]。
- 29) Bartol’d 1973 : 148 参照。
- 30) 佐口氏に拠ってアストラハーンからウルゲンチまでの旅程に関していえば、16世紀において中央アジアの商人は船を有しておらず、海路に比べて隊商の人数や商品量に制限を受け陸路の方が彼らにとって有利であったという [Saguchi 1966 : 30]。このあたりの事情が影響しているかもしれない。なお、Togan 1947 : 133-134 の報じるところでは、‘Abdallah Khān が1579年にマンガト-ノガイ族の Urus Mirza に10万テンゲの援助をしたのをはじめ、16世紀末には、ホラズムとマー・ワラー・アンナフルの支配者たちによって反ロシア扇動活動が行われていたという。アストラハーン再遠征の要請はこうした動きの一環として捉えられよう。

参考文献

Ali(Ali Akbar Khatai)

1978 : *Khitāy-nāme*. Ed. by I.Afshar, Tehran, 1357(1978),

Allen(W.E.D.Allen)

1963 : *Problems of Turkish Power in the Sixteenth Century*. London.

1972 : *Russian Embassies to the Georgian Kings(1589-1605)*. Edited with Introduction, Additional Notes, Commentaries and Bibliography by W.E.D.Allen, Texts translated by Anthony Mango. Vol.I, Cambridge.

Asrar(N.A.Asrar)

1972 : *Kanunı Sultan Süleyman Devrinde Osmanlı Devletinin Dini Siyaseti ve İslâm Âlemi*. Istanbul.

Bacqué(J.-L.Bacqué-Grammont)

1970 : Une liste ottomane de princes et d'apanages Abu'l-Khayrides. *Cahier du monde russe et soviétique*, XI,3.

1971 : Les événements d'Asie Centrale en 1510 d'après un document ottoman. *CMRS*, XII, 1-2.

1978 : Deux rapports sur Şâh Isma'îl et les Özbeks (Études Turco-Safavides, X). *Quand le crible était dans la paille.Hommage à Pertev Naili Boratav*. Paris.

1979 : Notes et documents sur les Ottomans, les Safavides et la Géorgie, 1516-1521 (Études Turco-Safavides, VI). *CMRS*,XX,2.

1986 : Les affaires Mogholes vues par un ambassadeur Özbek à Istanbul vers 1550. *Passé Turco-Tatar Présent Soviétique*. Paris.

1987 : *Les Ottomans, les Safavides et leurs voisins : Contribution à l'histoire des relations internationales dans l'Orient islamique de 1524*. Istanbul.

Bartol'd(B.B.Бартольд)

1973 : Отчет о командировке в Туркестан. *Сочинения*,VIII. Москва.

Bennigsen(A. Bennigsen)

1967 : L'expédition turque contre Astrakhan en 1569 d'après les registres des «Affaires importantes» des Archives ottomanes. *CMRS*, VIII,3.

1978 : et al., *Le khanat de Crimée dans les Archives du Musée du Palais de Topkapı*. Paris-La Haye.

Çetin(A.Çetin)

1978 : Arşiv Terimleri ve Deyimleri. *Vakıflar Dergisi*, XII.

1979 : *Başbakanlık Arşivi Kılavuzu*. Istanbul.

Danişmend(İ.H.Danişmend)

1971 : *İzahlı Osmanlı Tarihi Kronolojisi*. vol.2, Istanbul.

d'Encausse(H.C.d'Encausse)

1970 : Les routes commerciales de l'Asia Centarale et les tentatives de reconquête Astrakhan d'après les registres des 《Affaires importantes》 des Archives ottomanes. *CMRS*, XI,3.

FB(Feridün Beg)

1274-75 : *Majmū'a-yi Munsha'at-i Salāṭīn*. 2 vols, Istanbul.

Fekete(L.Fekete)

1977 : *Einführung in die persische Paläographie*. Budapest.

Gökbilgin(M.T.Gökbilgin)

1957 : Arz ve Raporlarına göre İbrahim Paşa'nın İrakeyn Seferindeki İlk Tedbirleri ve Fütuhâtı. *Bell*, XXI.

Hamada(濱田正美)

1984 : トルコ, 『アジア歴史研究入門』4 京都 同朋舎.

Hammer(J.de Hammer)

1836-37 : *Histoire de l'empire Ottoman depuis son origine jusqu'a nos jours*. Tomes 4-7. Paris.

Haneda(羽田明)

1965 : 明帝国とオスマーン帝国, 『西南アジア研究』4.

Hinz(W.Hinz)

1970 : *Islamische Masse und Gewichte*. Leiden/Köln.

Hori(堀直)

1982 : 『西域土地人物略』について, 『歴史における民衆と文化』 国書刊行会.

Horikawa(堀川徹)

1979 : シャイバーニー・ハンとアルクーク城, 『史林』62-6.

1986 : オスマン帝国とシャイバーン朝との外交関係, 『第23回事業報告書』(財)三島海雲記念財団.

1989 : ポスト・モンゴル期のイスラーム圏, 『シンポジウム「イスラームとモンゴル」』中近東文化センター研究報告 No. 10.

1990 : T. Horikawa, Aleppo and Central Asia in the Sixteenth Century : A Brief Note. *Geographical Views in the Middle Eastern Cities*, II Syria. Ibaraki.

İnalcık(H.İnalcık)

1948 : Osmanlı-Rus Rekabetinin Menşei ve Don-Volga Kanalı Teşebbüsü(1569). *Bell*, XII.

Jenkinson

1907 : The voyage of Master Anthony Jenkinson, made from the citie of Mosco in Russia, to

the citie of Boghar in Bactria, in the yeere 1558 : written by himselfe to the Merchants of London of the Moscovie companie. R.Hakluyt, *The principal navigations, voyages, traffiques & discoveries of the English nation*. vol. 1, London-New York.

Johnson

1907 : Certaine notes gathered by Richard Johnson (which was at Boghar with M. Anthony Jenkinson) of the reports of Russes and other strangers, of the wayes of Russia to Cathaya, and of divers and strange people. R.Hakluyt, *The principal navigations, voyages, traffiques & discoveries of the English nation*. vol. 1, London-New York.

Kırzioğlu (M.F.Kırzioğlu)

1976 : *Osmanlılar'ın Kafkas-Elteri'ni Fethi (1451-1590)*. Ankara.

Komatsu (小松久男)

1988 : Mehmet Saray, Rus İşgali Devrinde Osmanlı Devleti ile Türkistan Hanlıkları Arasındaki Siyasi Münasebetler (1775-1875), İstanbul, 1984, 160pp. 書評, 『バルカン・小アジア研究』14.

Kortepeter (C.M.Kortepeter)

1972 : *Ottoman Imperialism during the Reformation : Europe and Caucasus*. New York.

Kurat (A.N.Kurat)

1966 : *Türkiye ve İdil Boyu*. Ankara.

Kütükoğlu (B.Kütükoğlu)

1962 : *Osmanlı-İran Siyâsi Münâsebetleri*, I. İstanbul.

Mano (間野英二)

1987 : バーブル・パーディシャーフとハイダル・ミールザ——その相互関係——, 『東洋史研究』46(3).

Mitsubishi (三橋富治男)

1963 : 十六世紀のオスマン・トルコと中亜・南露周辺, 『史学』36(1).

Munshi (Мухаммед Юсуф Мунши)

1956 : *Мухим-ханская история*. (пер.) А.А.Семенов, Ташкент.

Oda (小田寿典)

1969 : 十六世紀初頭の中国に関するイスラム史料——アリ＝エクベル著『中国記』の評価をめぐって, 『史林』52(6).

Osmanlı

1990 : *Osmanlı Arşivi Bülteni*, I. İstanbul.

Quelquejay (Ch.L.-Quelquejay)

- 1967 : Une source inédite pour l'histoire de la Russie au XVI^e siècle. Les registres des Mühimme Defterleri des Archives du Baş-Vekâlet. *Cahier du monde russe et soviétique*, VIII,2.
- Refiq(A.Refiq)
1915 : Baħr-i Khazar-Qaradeniz Qanalī ve Ezhderhān Şeferi. *TOEM*,8.
- Ruzbihan(Фазлаллах ибн Рузбихан Исфрахани)
1976 : *Михман-наме-йи Бухара*. Москва.
- Sadikov(П.А.Садиков)
1947 : Поход Татар и Турок на Астрахань в 1569 г. *Исторические Записки*,22.
- Safvet(Safvet)
1910 : (Khazar)Denizinde 'Othmānī Sanjāghī. *TOEM*, 3 .
- Saguchi(佐口透)
1966 : 『ロシアとアジア草原』吉川弘文館.
- Sakamoto(坂本勉)
1990 : 巡礼とコミュニケーション, 『移動と交流』岩波書店.
- Selaniki(Selānikī Mustafa Efendi)
1989 : *Tarih-i Selānikī (971-1003/1563-1595)*. M.İpşirli(ed.), Istanbul.
- Semenov(A.A.Семенов)
1954 : Шейбани-хан и завоевание им империи Тимуридов. *Материалы по истории Таджикиков и Узбеков Средней Азии*, вып. 1(Труды,хп). Сталинабад.
- Seydi(Seydī Re'is)
1895-96 : *Mir'at al-Mamālik*. Istanbul, 1313.
1899 : A.Vambéry(tr.), *The Travels and Adventures of the Turkish Admiral Sidi Ali Reis in India, Afghanistan, Central Asia, and Persia, During the Years 1553-1556*. London.
- Seyfi
1968 : J.Matuz(ed.), *L'ouvrage de Seyfi Çelebi, historien ottoman du XVI^e siècle*. Paris.
- Tansel(S.Tansel)
1969 : *Yavuz Sultan Selim*. Istanbul-Ankara.
TOEM : Ta'rikk-i 'Othmānī Enjūment Mejmū'ası.
- Togan(A.Z.V.Togan)
1947 : *Bugünkü Türklü Türkiye ve Yakın Tarihi*. 2. Baskı, Istanbul, 1981.
- Topkapı
1938-40 : *Topkapı Sarayı Müzesi Arşivi Kılavuzu*. 2 vols. Istanbul.

1985 : *Topkapı Sarayı Müzesi Osmanlı Saray Arşivi Kataloğu. Fermânlar*. I. Fasikül No E. I-12476. Ankara.

1988 : *Topkapı Sarayı Müzesi Osmanlı Saray Arşivi Kataloğu. Hükümler-Beratlar*. II. Fasikül No E. I-12476. Ankara.

TR

MS : Mîrzâ Haydar Dughlat, *Ta'rikk-i Rashîdî*. MS British Library Or. 157.

1898 : *A History of the Moghuls of Central Asia Being the Tarikh-i-Rashidi of Mirza Haidar, Dughlat*. An English Version, Edited by N. Elias, the Translation by E.D.Ross, London, Rep. 1972.

Tveritina(Ф.С. Тверитинова)

1974 : Дарственная грамота(Мюльк-наме)Султана Селима II на имя везира и капуда-на Пияле-паши (1587 г.) *Письменные Памятники Востока*, ежегодник 1971. Москва.

Uzunçarşılı(I.H.Uzunçarşılı)

1943 : *Osmanlı Tarihi*. II, 4. Baskı, Ankara 1983.

1951 : *Osmanlı Tarihi*. III-1, 3. Baskı, Ankara 1983.

1954 : *Osmanlı Tarihi*. III-2, 3. Baskı, Ankara 1982.

Vámbéry(A.Vámbéry)

1873 : *History of Bokhara*. London, Rep. in New York, 1973.

Wada(和田博徳)

1958 : 明代の鉄砲伝来とオスマン帝国——神器譜と西域土地人物略——, 『史学』31(1-4).

Yajima(家島彦一)

1986 : コメント 1, 『シンポジウム「巡礼—Part I—」』中近東文化センター研究会報告 NO. 7.

Yule(H.Yule & H.Cordier)

1915 : *Cathay and the Way Thither Being a Collection of Medieval Notices of China*. Vol. 1, London.